光明

こうみょう

新春――第237号

特集1

参詣鉄道の記憶

～長谷鉄道今昔～

特集2 節分と豆まき

新連載 日常仏教語解説

真言宗豊山派

光明 目次 第237号 新春

01 管長猊下のお言葉

05 特集1
参詣鉄道の記憶～長谷鉄道今昔～

13 新連載
日常仏教語解説①

15 最終回
法事のしおり⑧

17 特集2
節分と豆まき

23 ヘルシーうれしい 精進料理㊳

25 黒川伊保子
人生のトリセツ④

27 長谷寺御朱印めぐり③

29 仏教童話㊽
きえた真珠の首かざり

37 作品募集 仏さまを描いてみよう！

38 宗派トピックス
川俣海淳猊下 大導師に
～女人高野 室生寺 正御影供～

40 こうみょうパズル

表紙写真
総本山長谷寺 観音萬燈会の登廊

悠久の時に想いを馳せて

あけましておめでとうございます
檀信徒の皆さまが
健やかに新年を迎えられましたこと
謹んでお慶び申し上げます
ますますのご健勝と
ご繁栄をご祈念申し上げます

令和八年　元旦

真言宗豊山派第三十五世管長
総本山長谷寺第八十九世化主
川俣海淳（かわまたかいじゅん）

――猊下（げいか）のご就任から早くも2年が経とうとしております。振り返ってのご感想をお聞かせください。

就任当初は、入山式や晋山式、各所へのごあいさつなどに追われ、誠にあわただしい日々を送っておりました。今はようやく落ち着き、心穏やかに日々を過ごしております。

長谷寺にて生活を重ねる中で、多くの檀信徒や参拝の皆さまとご縁を頂く機会が増えてまいりました。折に触れて言葉を交わすこともございますが「長谷寺に来てよかった」とのお声を頂戴するたびに、これに勝る喜びはないと、深く感じております。

先日には、歌手の鳥羽一郎氏が長谷寺に来山され、「長谷寺の雨」という曲を発表したとのご報告を受けました。芸能や文化といった面からも長谷寺を題材とする作品が次々と現れることに嬉しさを覚えます。

――総本山長谷寺における新たな取り組みなどがございましたら、ご教示いただけますでしょうか。

令和7年から「ぼたん回廊」という新しい取り組みを始めました。長谷寺の牡丹は、150種7，000株という非常に多くの品種が栽培されており、参拝の皆さまに、楽しんでいただいています。

しかし温暖化の影響で開花時期が早まり、4月中にはほぼ花が散ってしまい、ゴールデンウィークの頃には牡丹の見ごろが過ぎていることが多くございました。

このような状況を受け、より多くの方に長谷寺の牡丹を楽しんでいただきたいとの願いから、4月下旬から、境内の登廊や嵐の坂に牡丹の鉢植えを多数配置し、和傘や毛氈（もうせん）で華やかに飾りつけをしました。この地植えの牡丹と鉢植えの牡丹の2段

川俣海淳猊下、鳥羽一郎氏、作曲家 斉藤功氏、桜井市市長 松井正剛氏

構えの取り組みにより、5月上旬まで牡丹を楽しんでいただけるようになりました。

例年、牡丹の見ごろの時期は混雑を懸念される方も少なくありませんが、近年は来山者の数もほどよく落ち着き、ゆっくりとお参りができますので、どうぞこの好機に境内を彩る大輪の牡丹をご覧に、足をお運びください。

――長谷寺は 令和8年に開山1300年の節目を迎えます。猊下のご所感をお聞かせください。

1300年前といえば奈良に都があった時代です。その頃から長谷寺の本尊、十一面観世音菩薩さまは今の場所に立たれ、人々を見守りくださっております。

この永き時の中で、数えきれない人々が観音さまに合掌し、祈りをささげ、膝をついて苦しみを吐露（とろ）し、尊いおみ足にすがって涙を流してまいりました。そのような信仰の歴史に想いを馳せますと、自然と胸が熱くなり、何としてもこの祖山長谷寺を護り抜き、次なる時代へと引き継いでいかねばならぬという覚悟と気概が沸き上がってきます。

開山1300年の記念事業といたしましては、五重塔の修復、記念法要の厳修、出開帳（でがいちょう）の実施などを鋭意進めております。これらの一大事業を成功に導くためにも、何卒、皆さまのお力添えをいただきたくお願いを申し上げます。

――最後に、全国の檀信徒に向けて、お言葉をお願い申し上げます。

総本山長谷寺は全国の檀信徒の皆さまによって支えられております。その檀信徒の皆さまにお喜びいただける本山であるために、日々の祈りを欠かさず、境内設備の充実を図り、地域とのつながりを大切にしながら、皆さまがより信仰を深めていただけるよう努めてまいります。

長谷寺にお参りいただき、さまざまなご感想や激励の言葉を頂戴することは、在山するものにとって何よりの励みとなります。どうぞ、長谷寺にお参りの際には、その歴史の深さを体感し、観音さまとのご縁をいっそう強く結んでいただけますよう、心から願っております。

微妙（みみょう）

この言葉ほど、本来の意味とかけ離れて使われている言葉はないかもしれません。「良くもないけど、悪くもない」「嬉しいようで、嬉しくない」など、中途半端な状態を表す言葉として使われているでしょう。

「微」と「妙」の2つの漢字には、どちらにも「優れている」「美しい」という意味があります。仏教では「みみょう」と読み、経典にも多く出てくる言葉です。仏さまの教えの素晴らしさや奥深さを「微妙（みみょう）の教え」と表現しています。

他には、夏目漱石が有名な小説『吾輩は猫である』の中に「天女が、この世では聞かれぬほどの微妙な音楽を奏でた」と記しました。

細かい調整のことを「微妙（びみょう）な力加減」と表現するのも、優れた調整の加減が必要という意味ですから、決して悪い言葉ではないことがわかります。なんとも微妙な言葉ですね。

我慢（がまん）

忍耐力のある人を我慢強い人と表すように、痛みや苦しみに耐えることを「がまんする」といいます。どちらかといえば良い意味合いが強い言葉かもしれません。

実は、煩悩の1つとして説かれているのです。自分を優れた存在と思い、他者を軽視する思い上がりの心を「慢（まん）」といいます。自分の心身が優れていて決して衰えることがないと思いこんだ状態を、「我」に捉われた「慢」で我慢といいました。

耐え忍ぶという意味で定着したのは、決して衰えないという意味が転じたのかもしれません。

思いあがった心のことを「慢心」といいますが、なるほど「慢」の「心」とはよく表したものです。

法事のしおり　最終回

「三十三回忌」

―虚空蔵菩薩―

平安時代の法事は、三回忌までです。時代を経ると七回忌や十三回忌が加わり、十三仏の信仰が定着した室町時代には、三十三回忌が行われるようになりました。

三十三回忌は、「弔い上げ」や「問い切り」とも呼ばれています。三十三回忌を節目として、亡き人への供養に大きな区切りをつけるのです。

その意味から、独特の作法が各地で行われてきました。位牌を墓の中に入れたり、菩提寺に納めたりします。「仏流し」と称して、それを川に流す地方もありました。塔婆も通常のものではなく、枝葉が付いた生木を削って戒名を書きます。

三十三回忌を「カミアガリ」と称するのは、供養を十分に受けた亡き人が、神仏の仲間入りをするからです。弔い上げやカミアガリには異説が多く、それを十七回忌、五十回忌、百回忌とする例もあります。なお、カミアガリは個人の霊から祖先の霊への移行であり、供養がなくなるわけではありません。

三十三回忌の本尊は虚空蔵菩薩。智慧と福徳にすぐれ、それを広大無限の虚空のように具えています。悟りを得るために欠かせない「真実を見極める力」を持ち合わせ、人々が願ってやまない豊かな恵みを惜しみなく分け与えます。星をつかさどり、災害を除く利益も絶大です。

虚空蔵菩薩の代表的な姿は、密教の智慧を象徴する宝冠を頭上にかぶり、右手には剣を持ち、左手には宝珠を載せた蓮華を握ります。右手の剣は研ぎ澄まされた智慧を表し、左手の宝珠は求めに応じて施す無限の福徳を意味します。

仏の仲間入りを果たした亡き人は、この世に生きる私たちに対して、智慧と福徳を存分に届けてくれます。まるで虚空蔵菩薩のように……。大切な故人からの恵みをしっかり受けとめ、心をさらに豊かにするのも、三十三回忌の大事な趣旨といえるでしょう。

虚空蔵菩薩

種子
「タラク」

真言
「オン　バザラ
アラタンナウ　オン
タラク　ソワカ」

真言の意味
「オーン　金剛宝あるものよ
オーン　トラーハ
スヴァーハー」